

ヘーゲルの『法哲学』 —— その成立の背景 (16) :

ヘーゲルの自然哲学批判

下城 一

Eine Untersuchung der Rechtsphilosophie Hegels ——

Über die Hintergründe des Zustandekommen der Rechtsphilosophie Hegels(16):

Hegels Kritik der Naturphilosophie

Hajime SHIMOJO

—— 前稿で指摘した通り —— 論文「信と知」(1802) で表明されるカント超越論哲学に対するヘーゲルの根本的批判は、ヘーゲル弁証法哲学の根幹を形成するものとして、その端緒は既に、1801年の教授資格審査討論用の「テーゼ」、並びに教授資格申請論文『惑星軌道論』に、十二分に盛り込まれていたと見ることができる。その思想形成の基底には、何よりイェーナ移住後、より活発に関わされることになったと考えられるシェリング哲学との対質があった —— 折しもシェリングは、フィヒテ哲学との対決を通じ、自然哲学から同一哲学への、自身の哲学の自立の途上にある —— 。そのことがまたヘーゲルに、並行して教授資格申請論文として、自然哲学(批判)としての『惑星軌道論』を選ばせることともなり、かつ討論用に、本論以前に提出された「テーゼ」に、自身の最直近の思想展開が最短で表明される、歴史の偶然を結果することにもなったとも考えられる¹。

本稿は、ヘーゲルの自然哲学との批判的対質を主題とするにあたり、まずは遡ってシェリング自然哲学の批判的検討を行う(第一節)。シェリング、フィヒテの問題意識の発端には常にカント超越論哲学があり、自然哲学においても、カント自然哲学の詳細な見極めが必要である(第二節)。更にまた、ヘーゲルが長年関心を寄せていたとされる²、シュトルム・ウント・ドランクの泰斗ゲーテの自然哲学をとり挙げ(第三節)、シェリング哲学との対照を通じ、ヘーゲルの自然哲学に対する基本的(批判的)スタンス、その展開、を検証する。

先回りして述べておけばヘーゲルは、シェリング自然哲学の展開を意識した時期があったとはいえ、自然哲学一般に対しては、最初から、カント超越論哲学を起点に、所謂自然哲学とは別系統の、寧ろ自然哲学批判と言える思想を展開していた。発端は、自然哲学的展開に対して極めて厳格に禁欲的態度を取っていたカントにあり、超越論哲学(超越論的演繹論)の延長線上で、ニュートン力学を批判哲学的に補完する『自然哲学の形而上学的原理』(1886)が執筆され、ニュートンの自然哲学(Phiosophia naturais:Natur Phiosophie:自然科学)では未検討の諸概念、その理論的前提を「形而上学的に」 —— 批判哲学的に厳密に論理的に可能な範囲で、すなわち独断論に陥らない範囲で —— 「動力学」的

¹ その観点に立てば、『フィヒテ、シェリングの哲学体系の差異』(1801)は、寧ろ一段階前の思想と見ることが妥当であり、特にシェリング的な「直観」概念の評価から、「テーゼ」以降のカント的な要請論に対する批判への展開に、重要な画期が見出されると考えられる。

² 『ヘーゲル伝』の著者ローゼンクランツは、一節を割いて報告している(Rosenkranz:Hegels Leben,s.339-341 仲埜訳 293頁)。

(第二章)に補完することが試みられていた。その理論的核心は、「物質とは、空間を充実にする限りでの運動可能なものである」(第二章動力学 定義一 Kant,Akad-Ausg.(KA)Bd. IV496)に集約されているが、世界の「存在」の成立を、ライプニッツの力の概念(目的論的世界観)に倣って、「空間」への「運動可能なもの」の充填とし、「運動」を論理的に「存在」に先行する世界の根本規定とみなす意味を持つ(「静止」は従って「空間」との規定により成立するとされ相対化される)³。とともに、その「運動可能なもの」と言われている、「力」について、ニュートン自身は、『プリンキピア(自然哲学の数学的原理)』では、「力」について問うことを⁴「我仮説を作らず」として禁欲したが⁵、ニュートンの業績は、ケプラーが最初に提起した物理学としての「重力」の想定(「重力」の発見)を、太陽系の現在の運動の説明に必要な想定であると「数学的に」証明した点にあり⁶、そもそもニュートンは「力」の概念規定には方法論的には立ち入っていない(ヘーゲルが批判する通り(『惑星軌道論』)「数学的でしかない」と言うことができる——因みに天文学的には、天体の運行は、プトレマイオスからコペルニクスに至るまで、天上の運動として神の運動、すなわち完全運動としての円軌道によって支配されると考えられており、物理学的に「力」

³ デビュー作『活力測定考』(1747)第一章「物体の力一般について」第一節でカントは、「運動している物体は力を持つとされる。抵抗に勝ち、バネを押し縮め、質料を移動させる、これらは作用すると言われるのである。感官の教えるものだけに目を向ければ、こうした力は物体に全く外部から伝えられるもので、静止しているときには物体は何ら力を持たないと見做される。ライプニッツ以前の学者たちはすべて、アリストテレスを唯一の例外として、この見解だった。アリストテレスの言う不可解なエンテレケイアが、その後、物体の作用の秘密だとされてきた。スコラ学者達はみなアリストテレスに従っていたが、総じてこの不可解なものを理解しなかった。…人間の理性はライプニッツに多くのものを負っているが、彼が初めて、物体には延長に先立って本質的な力が宿り、さらにはその力は延長にさえも先だってその物体に属していると教えたのだった。延長以外に、いやむしろ延長に先立っている何ものかが存在する、というのが彼の言葉である」(KA, I 17)としている。アリストテレスが静止している物体が持つとした「エンテレケイア」は、「実体が可能態の状態から、自分に内在する力、あるいは作用によって、完全に自己を実現した状態ないし形相を指すとされ(『自然学』191b28～)、ライプニッツでは、それが自己実現への作用、傾向性、力とされた。実体に内在する力という考え方は、中世では「隠れた質」、あるいは飛翔体の推進力の説明(インペトゥス)等として受け継がれたが、カントはこれらとは一線を画して、ライプニッツによって提起された「活力-死力」の区別を、近代力学的に測定可能なものとして定式化し、それによりニュートン力学の補完を果たすことを目指した。同第十五節「…それゆえ私はあらゆる運動を二つに大別する。第一の運動は、運動する物体の中に含まれており、障碍による抵抗が無ければ無限に持続するという性質を持つ。今一つの運動は、駆動する力が持続的に作用する限りの運動で、それを消失させるのに抵抗などは必要なく、外部の力のみに基づいているゆえに、その力が持続しなくなるだけでただちに消失してしまう運動である」(KA I 28)。「第一の運動」が「活力」で、「無限で」「永続的に作用を行い、自らは不滅である力の内的な源泉」であり、「第二の運動」が「死力」、「無限の活力が…時間であるとすれば、それに対する一瞬、線であれば点のようなもの」とされる(KA I 29)。「活力」が齎す運動は「速度の二乗に比例」し、「死力」が齎す運動は「速度の一乗に比例」(KA I 30)することの証明を「形而上学的見地を含め行」うこと(KA I 29)が『活力測定考』の目的とされる。

⁴ ニュートンの論敵デカルト派は、その想定がスコラ的な「隠れた性質」(qualitatus occultus)にあたるとして批判した。

⁵ 第二版 1713「総注」。

⁶ 山本義隆『重力と力学的世界観』(1981) p63～参照。

の想定を必要と考えられることはそもそも無かった —— 。カントは、理論的に、「根本力」としての「引力」「斥力」を想定し、特にニュートンがその第三法則において「作用／反作用」的として措定した「斥力」を、「空間」に対する「物質」の「抵抗」「不可透入性」（即ち「空間を充填する運動可能なもの」による「感覚可能な」「抵抗力」の原因）として、物質を存在させる「第一のもの」（形而上学的）としている。その「斥力」は、「空間」と「空間」（「物体」がその「運動力」によって占める「空間」）の「接点」で働くとき（KA IV511）⁷、「接点」即ち「無限小」の距離・空間におけるその作用は、実際には規定不能とされる（KA IV520f.）⁸。

注目すべき点は、カントが、そうした規定に際し、「形而上学」と言いながら、批判哲学を踏まえて、「力」の「作用」が現われる「現象」以上に思弁的に踏み込むことをせず、あくまで「現象」成立のための理論的前提としてのみ必要不可欠な規定を論理的に遡って措定する、謂わば徹底した現象主義にとどまっていることである⁹。

他方、シェリングは、「根本力」が「経験」可能な「感覚的なもの」の総体を超える「無限」であるゆえに¹⁰、それを「世界の外に在る」として、「引力」「斥力」に「共通な第三者」、即ち「引力／斥力」の対立がそこから生じてくる「共通の力」を「根本力」と措定し、これに「重力」をあてている。

シェリング哲学の一時期を画することとなった自然哲学のこうした進め方に対し、一旦はシェリングのカント超越論的哲学に対する批判と共闘したヘーゲルが採った態度は、しかし、あくまで「現実」を重視する —— その点では寧ろカントの批判哲学の立場と共通し、シェリング的な自然哲学の形而上学的想定を原理的に批判する —— 「現実」「実在」の成立のその論理的前提を遡って考えること、を原則とした。

根本における、こうした「認識」観の違いが、カント、シェリング、ヘーゲルの哲学の方法論上の相違、ひいてはその哲学の体系展開上の差異に発展し、片や経験的自然科学の典型としてのニュートン力学そのまま擁護することとなる、カントの超越論的理論哲学、ならびに批判哲学の立場（『自然哲学の形而上学的原理』の構想を含む）を生み、他方、そうしたカント超越論哲学（超越論的演繹論）に対し、その原理的統一の不十分さ（理論理性と実践理性との分離）を指摘し、より「根源の」「同一性」に遡って補完し（フィヒテ「根源的自我」、シェリング「根源的同一性」「絶対者」）、そこからの意識以前の（世界）展開（「構想力」「行為的自我」による）を考えるフィヒテ事行論、シェリング自然哲学・同

⁷ 『自然哲学の形而上学的原理』第二章 動力学、定義六、注解

⁸ 同上、定理八、注解一（三）

⁹ 「〔斥力は〕その可能性に関してそれ以上定義することができず、従って根本力と見做されなくてはならない」（定義四、注解二 KA IV502）。「〔斥力は〕他のいかなる力からも導出されえない、即ち理解され得ないからこそ根本力と呼ばれるのである」（定理七、注解一 KA IV513）。

¹⁰ 当時の、黎明期にある微積分学の進展を踏まえた、「無限」に対する考え方の違いが関わっていることを指摘できる。

一哲学の立場（「完成された批判主義」）が構想されるとともに、更にヘーゲルの、「超越論的演繹論」をカントは既に解決済みとする（「感覚的なものの多様」と「概念」との「総合」は、「構想力」において既に果たされているとする（論文「信と知」）の立場）、即ちカント、フィヒテ・シェリング双方に対して批判的な立場とが、相別れることとなる。

1. シェリング哲学の展開・自然哲学

「完成された批判主義」を標榜し、フィヒテ知識学の試みに則って、カント超越論哲学の補完を目指したシェリング哲学が、どこから「形而上学的」な一線を超えたと見做され、批判されねばならないか、それが問題である。先ずはカント超越論哲学との対質を通じて彫琢されたシェリング哲学の歩みを概観し、その対決点とみなされる、カントの「動力学」（『自然哲学の形而上学的原理』）に対するシェリングの批判を検証する。

シェリングがその哲学の出発点に据えたのは、カント超越論哲学を批判するフィヒテ知識学の試みであった。フィヒテは、カントが超越論哲学において区別した分析判断、総合判断の別や理論理性と実践理性の分離を、体系構成上の不十分さに起因するものと見て（vgl. *Fichtes Werke*, hrsg. v. I. H. Fichte (FW) I 19）、根本的な同一原理、「絶対的自我」の超越論的な措定の必要を主張し、そこからの超越論哲学の補完を展開していた（「事行」論、*ibid.* I 96f.）。シェリングもまた、哲学は根本命題から展開される統一性の形式を持つ一つの全体でなければならないとし（vgl. *F. W. J. Schellings Sämtliche Werke*, hrsg. v. K. F. A. Schelling (SW) I 87 『哲学一般の形式について』 1794）、『哲学の原理としての自我について—— 或いは人間の知識における無制約的なものについて』（1795）で、フィヒテ知識学の第一原理である「絶対的自我」が、「存在の原理」（*principium essendi*）であると同時に「思惟の原理」（*principium cognoscendi*）であり、それがカントが人間知性には不可能なものとしていた「原型的知性」（*intelleutus archetypus*）、即ち「無制約者」にあたるとした。シェリングに言わせれば、カントが「他の力から導出できない…… 故に根源力（*Grundkräfte*）」とした「引力」「斥力」は、物質の概念の論理的分析の結果、因果論的に「要請」されたものでしかなく、本来、原理から構成されるべき「所産」が「前提」とされてしまっているのに他ならない。「[カントの動力学、物質の構成論は] 本来そこで終わるべき、まさにそこから始まっている」（SW III 281 『自然哲学の諸理念』 1797）とされる。

ここに分水嶺の一つがあることは明らかだが（「根本原理」の想定を巡り前提としての因果論的構図の踏襲）、シェリングに根本原理からの出発の立場を取らせることになる責任の一半はカントにもあったと見ることができる。カントが『純粋理性批判』『超越論的演繹論』で持ち出さざるを得なかった、直観像を構成する「構想力」の理論をフィヒテ、シェリングは超越論哲学における不十分な想定とみて批判するのだからである—— その点は前稿で検討したヘーゲル「信と知」も同様である——。即ちカント超越論哲学そのものの論理的枠組みに、フィヒテ・シェリング的な構成主義へと踏み越えてもおかしくない論理的欠点、換言すれば、踏み込まなければ完結し得ない論理的不徹底を見ている訳である。

フィヒテは、「知識学」において次のように書いていた —— 「自我の無限に外へ向かう活動性に、…ある衝撃 (Anstoß) が生じ、それにより決して消滅するはずのないこの活動性は折れ曲がって内に向かう。…正反対の方向が合一される状態、これこそ構想力の活動性に他ならない」 (FW I 227f. 『哲学の原理としての自我について』) —— 。シェリングは、フィヒテのその「衝撃」、即ち「非我」の概念を批判し、次のように主張する。

「精神は、自己自身、固有の働きによってのみ存在する。従って、精神には、元々対立した働きがなければならないだろう。…かの両活動性は自我の内に根源的に合一されている。自我はこれを、自我が両者を単一の働きの内統合することによって知る。この働きを直観という」 (SW I 368f.)

「客体は我々に外から与えられるようなものではなく、対立する活動から遡られ、対立を産みだす第三の共通のもの (κοινον) 即ち根源的精神の自己活動の所産である。直観において働くかの精神的自己活動をカントは正当にも構想力に帰している」 (SW I 357)

加えて、フィヒテ知識学において、知識学それ自体が「非我」との遭遇を完遂して¹¹、実践的に完成してみないと分からない「前提」であるとされていた、人間の知の内に実際に「一つの体系」が存在するかどうかについて、シェリングはそれを、「前提」である以上に同時に根本命題の内に表現されている「絶対者」によって根拠づけられているものと見る。それを行為する精神が自ら自己直観する、というのがシェリングの哲学の根本原理である。

「何かを知りたいと思う者は、同時に彼の知が実在性を有することを欲する。実在性なき知は永遠の循環に… 陥る。全てがそれにかかっている実在性の究極的な一点が存在しなければならない」 (SW I 92)

「存在するものの全ては自我の内在于、自我の外には何もない」 (SW I 192)

フィヒテの「絶対的自我」を、スピノザの「自己原因」 (causa sui) としての「実体」の概念に倣って、「ただ自己自身によってのみ、すなわち、その有を通してのみ考えることのできる何かあるもの」とするシェリングのそうした解釈 (『哲学の原理としての自我について』 SW I 163) に対しては、しかし当のフィヒテは、 —— 「そうした「絶対的な有」からの出発といった —— 「批判哲学の限界」を超える試みは、「知の可能的根拠としての自我」という「超越論的概念の限界」を超えることになり、自我あるいは純粋な意識を否定する「スピノザ主義」に陥いるとして、当初から批判的であった (『全知識学の基礎』 FW I 100f.)。

シェリング自身は、寧ろスピノザの「実体」 (「存在」) 論を、フィヒテの「無制約」な「絶対的自我」の立場によって批判的に深めていると考えており、スピノザ哲学自体を

¹¹ この点でフィヒテは、なお「批判哲学の限界」にとどまっている (ヘーゲル『信と知』)。

批判して、それが「世界」すなわち「絶対的な客観」（フィヒテ知識学的に言い直せば「非我」）から出発するのは「無制約的な絶対的自我」の立場に未だ立ち得ていないからであって、（フィヒテ知識学同様）「非我」によって「制約されている自我」の立場に止まっ
ていてはならないとする（vgl.SW I 170）。主観に対置されない「絶対的」な「非我」という概念（シェリング、スピノザ）は、「矛盾」以外の何物でもないからである。——「無制約」な「絶対的自我」の立場からのシェリングのこうしたスピノザ哲学批判は、後々のヘーゲルの「自然哲学」に対する批判、それを踏まえた自身の「現象」からの立場（「テーゼ」『惑星軌道論』）を理解するのに、極めて興味深いものである。「無制約的な絶対的自我」を根源に据えるシェリング哲学自身が、そのことによって「制約された自我」と「非我」の存在、およびその「対立」する関係を「絶対的自我」からのアプリオリな導出として、どう説明するか、という問題を惹起せざるを得ないからである¹²。

自身の解釈の正当性を立証しようとしてシェリングが取った方略は、超越論哲学における「要請」論の立場を、「直観」概念によって読み替えることである。「無制約」な「絶対的自我」から「世界」の展開を考えるシェリングの立場からは、カント超越論哲学の、理論理性の立場からは捉えられないとされ、実践理性の「要請」として定立された神、自由、永遠の命の存在は、いずれも理論的にその必然性についての十分な説明がなされているとは言えず——例えば、意志の自律、即ち自由と、最高善の可能性の為に要請される全能の神、即ち絶対的因果性との関係、換言すれば主観と客観との対立、とその「統一」の説明——批判哲学ではそれが単に「要請される」だけにとどまって、結果的に独断論を批判する批判哲学もまた、独断的であるにとどまっていると言われざるを得ないとシェリングは批判する（vgl.SW I 285f.）。シェリングに拠れば、絶対的な主観の立場に立って客観的なものを廃棄する「批判哲学」の立場にとっても、他方、絶対的な客観の立場に立って主観的なものを廃棄する「独断論」の立場にとっても、いずれにとっても問題は、主観と客観との間の「移行」、即ちそれらの「統一」なのだが、ヤコービによるスピノザ批判、即ち「〔スピノザ哲学にあっては〕無限なものから有限なものへの移行が一切存在しない」、言い換えれば「世界の内在的原因」（即ち客観）だけがあって、「絶対的、人格的存在」（主観）が無いとする批判はその限り正しい、とシェリングは言う（vgl.SW I 313ff.）。しかし逆に、スピノザ哲学の優位性は、寧ろその「内在的原因性」の概念に見出されるべきであって、そこからヤコービの批判を逆に考えれば、有限なものから無限なものへの移行だけが考えられ得るのであり、スピノザ哲学（独断論）に対しては、——「〔無限なもの様態と考えられる〕有限なものは、無限なものと同じになるように、そして絶対的な客観の無限性の内で、没落するように努力しなければならない」（SW I 316）——と「要請」されねばならない、そうシェリングは言うのである。

更に続けてシェリングは、スピノザ哲学（独断論）の問題点は、「有限なもの」の因果

¹² シェリングは当面、純粹な自我と制約された経験的自我との関係を「抗争」と規定している（vgl.SW I 200）。

性がその「制約」によってしか説明されず、即ち絶対的因果性から質的に説明されるのではなく、ただ量的に偶然的にしか説明されないゆえに、端的にそれが否定されざるをえない点にあるとして、自身の「完成された批判主義の立場」では、有限な主観の世界を実践的に拡大し、自己の制限を打ち破り、あらゆる対立から解放された主観の不変の「自己性」(Selbstheit)の獲得が目指される、とされる。シェリングが自らの「完成された批判主義」に向けたこの「要請」は、不変の自己性を獲得する行為、すなわち「知的直観」(intellektuale Anschauung)によって可能となるとされる(SW I 318)。

「我々全ての者に、一つの秘められた、驚くべき能力が内在している。我々を、時間の中で生じる変転から我々自身の最も内なるものに、つまり、外から付け加わったものを全て脱ぎ去った自己自身へと引き戻す能力である。そこで我々は我々の内における永遠なるものを不変性の形式の元に直観する。この直観は最も内的な、最も固有な経験であり、我々が超感性的世界について知り、また信ずるところのものは全てただちにこの経験にのみ依存している」(ibid.)。

問題は然し、ここからなのであって、先にシェリングが独断論に対して行っていた批判、即ちその「有限なもの」の区別が、「絶対的因果性」により「必然的」になされるのではなく、「量的」「偶然的」なものに止まっているとの批判が、自身の「完成された批判主義」の立場に対しても向けられねばならないからである。すなわち「自然の(質的)力動的段階的系列のアプリオリな導出」の問題である。

先回りして述べておけば、上に述べたような、この時期のシェリングの、フィヒテ絶対的自我哲学に依拠しつつそれを一歩進めてカント超越論哲学の批判としていく哲学構想に対し(『哲学一般の形式の可能性について』以降)、ヘーゲルが、慎重な姿勢を崩さなかったこと、寧ろカント超越論哲学・実践哲学の立場に立って距離をとり続けていたことは銘記されておかねばならない(vgl.Br I 24)。ヘーゲルに言わせれば、「絶対的自我としての神の理念」を「より深い深み」に向けて掘り下げるシェリングの試みは、「秘教的な哲学」を結果し、目指されるべきは、寧ろカントの実践哲学を基礎とする「公教的な」原理に基づく哲学(ibid.)に踏みとどまって、「表象に保持されている自我に対する絶対的自我による直接的な規定」を解明することである(「哲学の課題」vgl.GW I 195f.)。

シェリング自然哲学の展開は、如上のフィヒテ自我哲学、スピノザ実体哲学の批判を踏まえたシェリングの超越論哲学的な立場(「完成された批判主義」)の上に開始される。自身の自然哲学の課題をシェリングは、次のように述べている。

「自然における力動的段階系列をアプリオリに導出すること」(SW III 69)

その構想の具体をシェリングは、フィヒテ知識学が標榜した「人間精神の行為的歴史」(FW I 222)をベースに、直接的には、カントが『自然哲学の形而上学的原理』第二章「動力学」で導入した「引力」「斥力」概念に依拠して展開している。カントは、その末尾「動力学への総註」で、「物質」の「存在」の第一の根本原因とした「斥力」に基づいて、「物質の第一性質すなわち空間を充たすという性質に基づいている斥力の根源的な種々の度に応じて、斥力の根源的引力に対する比率が種々に無限に異なる」と考えることができよう」(KA IV 523ff.)としていた。

「斥力」の強さの「度」に応じて「無限に異なる」とされた「自然の力動的段階」の決定をカントは、「自然科学の全課題中、最も重要な課題」としていたが(ibid.)、その「自然の力動的段階」をシェリングは、「系列」として、「内在的原因」からアプリアリに導出することが可能であると想定し直した訳である——カント自身は、後に詳述するように、「斥力」の「力動的段階」の具体については、「斥力」が「物質」存在の「空間」に対する「表面力」として、「物質」相互の「抵抗力」として作用し、「接点」としての「無限小」空間において作用すると考えられることから、実際には測定不能としていた。つまりカントはその「決定」を、「形而上学的」にではなく、形而下的な「自然科学」の課題に委ねた訳である——。シェリングが、そうした謂わば「形而上学的」な、アプリアリな「導出」を、なお可能と考えた根拠として、上述の、フィヒテ知識学における「能動的絶対的自己直観」としての「行為」概念(「行為的直観」)への依拠が指摘できる。

シェリングは自身の思考について、次のように規定していた。

「精神は一般に客体を直観する時、ただ自己自身を直観している」(SW I 366)

つまり「自然の力動的段階」を思惟している時の自身の精神は、自身の「力動的段階の思想」を、そこ(自然)に見ている、と考えるのである——さしあたり、この思想は、後に見る、ゲーテの「根源的現象」論に通じるものがあり、またヘーゲルも『惑星軌道論』で、数学的法則性について、「自然の内に理性的なものを見てとる」ことを同時に「それが自然法則である」としている(Vgl.GW5 238)。スピノザの、「神即自然」の思想をそこに見ることもできるだろう——。その点から見れば、先のカントの「自然の力動的段階」の「系列」は、シェリングにおいては、先ず、それを思惟する「精神」の「系列」である。

「我々の精神の内には、自分自身を有機組織化しようとする無限な努力が存在する。それゆえ、外界の内にも、有機組織化への普遍的傾向が開示されなければならない」

(SW I 386)

「人間精神の歴史は、順次、自己自身の直観、純粹自己意識に到達するまでに到達する様々な状態の歴史に他ならない」(SW I 382)

「自然の体系は同時に我々の精神の体系である」(SW II 39 『自然哲学の理念』1797)

「自然は見える精神、精神は見えざる自然である」(SW II 56 同上)

そうであるとして、問題はしかし、「物質」の「多様性」を決定するとカントが述べた、「根源的引力に対する斥力の比率」の決定、換言すれば「斥力」の強さの「度合い」「度」の決定が、果たしてアプリアリに可能なものなのかどうか、決定可能だとすれば、それがどのように可能なのか、に移行する。

シェリングはカントが「引力」「斥力」の「比」(*das Verhältnis der Kräfte*) に求めた「物質の多様性の原因」を、「第三のもの」として「引力」「斥力」双方の「根源力」とした「重力」からの「作用比」(*die Proportion der Aktionen*) に見出されるとする —— 「自然としての〔重力の〕所産の多種多様性の全ては、〔重力の〕諸作用の種々の比率にのみ起因し得る。自然の全多様性は、根源的作用の内にのみ求めるべきである。物質は普く一つであり、根源的な結合の比率のみが多である」(SW III 34f. 『自然哲学体系第一草案』1799) —— 。だが実際にはシェリングは、その比率を自身の理論が示す必然性に則ってアプリアリに決定できたわけではなく、根源的「重力」の「引力」「斥力」への展開として理論的に導出される「自然生成論」のアプリアリな形式的体系の用意された一般的な枠組みの中に、実際の自然のうちに見いだされる諸力 —— カントも前掲書「第二章 動力学」で挙げてみせている「引力」の作用である「凝集」「熱」「光」「流体」、「弾性」に関わると認められている諸力、「化学的親和力」、「有機体」が持つ諸力、等 —— を段階的に当てはめてみせているだけである。

シェリングに拠る、そうした自然哲学の展開の一例として、「磁力」の例を検討してみる。「磁石」が示す「磁力」について、シェリングは『世界霊について』(1798)で、「実在的に対立した両極化した原理の作用」を「アプリアリに確実」としており(第六章)、「物質」の「両極性」構造の事例として摩擦、加熱(「フロギストンの励起」)による帯電現象を先ず挙げ(SW. II 476f.)、そうした「電氣的励起現象」が「磁氣的励起現象」と同じ「法則」に基づく「メカニズム」を持つとしている(SW. II 480f.) —— 「われわれはこれによって、「引力」という死せる概念を追放する」ibid.) —— 。物質の励起現象を引き起こす原因(「外的原因」)を「積極的原因」とするとき、それを受ける「物質」は「消極的原因」(「マイナス」の「反発力」)を持つと理論上想定されるが、実際にそれが観察されるのは「磁化」の度合いが物質によって異なる「磁力〔の現象〕」においてである —— 「この原因〔外的積極的原因〕によって磁石は磁気の積極的原因と力動的結合関係にある。…そしてまたこの原因〔磁石内部の消極的原因〕はそれ自身の内で異質で二分化できなければならぬ」(SW. II 482) —— 。ここから「普遍的世界秩序の可能性」が内的に想定されるが、問題は、その物質内部で生じなければならない「異質性」に基づく原理的分化(「段階的系列化」)がどのように見出されるか、であるとシェリングは言う。

「普遍的世界秩序の可能性は、物質的諸原理から説明できない。そのような諸原理そ

のものがすでにその内部でのみ可能な、ある世界秩序を前提するからである」(SW.480) 見られる通り、シェリングは「物質」単独でその「段階的秩序」即ち全体的な「普遍的世界秩序」を含む生成までを説明可能であるとはしていない。シェリングの自然哲学が — 上 — に示した「精神の自己直観」の論理に基づいて — 同時に精神哲学でもあることをそれは示唆していよう。

そもそも最初から「二極」に分かれる「磁力」の現象は — カントがニュートンに倣って周到に、「斥力」を、それが物質の「第一根本力」としつつも、現象する「引力」と不可分の力として規定するにとどめたのに対し — 対立する二力の「根源力」として、バーダーに倣って「第三のもの」「共通のもの」(κοινων) を想定し、それに「重力」を当てるシェリングの立場にあっては、この上ない事例といえ、磁気現象、電気現象のいずれも説明不能な「引力」現象より遥かに広く現象を説明することが可能な「根本力」にふさわしい対象と見做されたことは想像に難くない(F.X.v.Baader *Sämtliche Werke*, hrsg.v.F.Hoffmann 1963, III 249, 258))。

が、しかし、「磁気化現象」が示す、「磁気化」の「度合い」、即ち「物質」の「磁気化」の度合いを決定する「異質性」の「度量」は、「引力」のようには「質量」に比例しないところが問題であり (SW.481)、シェリングは、それを特定可能とするための「磁力」の「基体」 — 「引力」にとっての「質量」にあたるような — 万物に汎通的であるはずの「磁力」の「媒体」の存在を求めて、プレヴォー、ベルヌーイ等の当時の磁力研究者が行っていた磁氣的現象の特殊な諸性質についての観察、実験を検討する (SW.482) — 「どのような特殊な諸性質が磁気という物質的原理に帰さねばならないかが問題である」(ibid) — 。全物質に「磁力」が偏在していることを示す「普遍的溶媒」の可能性として、「光と熱」の現象に関わると考えられていた「エーテル」が検討されるが (ibid.484f.)、シェリングは、最後、次の様を書いて章を締め括っている。

「なお、以下の点のみを私は指摘しておく。磁気の積極面は間違いなく「光」のうちに現われるのと同じものだが、疑いなく地球の磁氣的両極性は自然学においては全く演繹できず、ただ前提されざるを得ない普遍的二元論の根源的現象であり、電氣的両極性における二元論は相当深い一段階で、はや現われるが、それは地表の二様の大気の異質性に至ると、また (二元論が新世界を形成する) 生命有機組織においては — 常識的にみて — 少なくとも — 消失する」 (SW.489f.)

「自然学においては全く演繹できず、ただ前提されざるを得ない」とされている「普遍的二元論」が問題である。前述の通り、シェリングは、フィヒテ的な「行為の自己直観」の原理に基づき、「われわれの精神の内には、自分自身を有機組織化しようとする無限な努力が存在し、それゆえ、外界の内にも、有機組織化への普遍的傾向が開示されなければならない」としていたが (SW I 386)、この段階に至って、無機的な自然から段階的に生成した

「有機的機構」(Organisation)が、却って「精神」における「普遍的有機的機構」(「普遍的な自己固有の機構」)として、逆に自然総体の根源であると捉え返されるに至る。

「一切の有機的存在者の段階的系列は同一の有機的機構(Organisation)の漸次的展開によって形成されてきた」
(SW II 348 『世界霊』)

「世界」を「精神」の「自己直観」として「生けるもの」として捉えようとする試みにおいてシェリングは、カント動力学における「斥力」を「二極性」の一方としながら更にそれを「肯定的」な「自然の第一の力」(SW II 229)とし、「より高次の自然論の第一の客観」としておいて(SW II 382)、もう一方の「対立する力」との「力動的均衡」においてそれが初めて「物質」として「知覚」されるとする。ゆえに自然の根源的な二重性は経験を超えて「要請」されるものにとどまり、「我々の精神の根源的二重性」の内にある、とシェリングは言う(SW II 396) —— 「自然論は直接的原理として普遍的二重性を前提し、この二重性を把握し得るためには物質の普遍的同一性を前提している」(SW II 390) ——。

以上を踏まえ、自然総体を普遍的有機体として捉えるべくシェリングは、経験的諸研究に依拠しつつ、賦活された一つの全体としての自然の理念の提示を目指す(SW II 40f. 『自然哲学の理念』1797)。「普遍的有機体を説明するためのより高次の自然学の仮説」(SW II 345)として提示されたのが、先に引いた —— 「一切の有機的存在者の段階的系列は同一の有機機構の漸次的展開によって形成されてきた」(SW II 348) —— である。無機的な自然との不断の交互作用を通じて有機的個体は、全体的自然の産出力を享受し、自らを個体として維持するとともに、自然の理念によって¹³、自然の全体を一つの生きた有機的機構として賦活化する¹⁴。

「無機的物質」の形成を論じる段階から、それが「精神」の「精神」自身による「自己直観」であるとするシェリング自然哲学の基礎的構図からすれば、「自然の全体を一つの生きた有機的機構として賦活化する」ことは、当然の展開で、更にスピノザ的な「能産的自然」即「所産的自然」の図式から「同一性」を根源とする哲学への展開を予想させる流れ

¹³ 経験と理念の関係について、シェリングは次のように述べている。「我々は経験を通じてでなければ、総じて何も知ることが無い。その限りにおいて、我々の知全体は経験的命題から成っている」(SW III 278 『自然哲学体系草案序論』1799)。「[しかし] アプリオリな命題とアポステリオリな命題との区別は ……我々の知識とその在り方に関してそれらの命題につけられている相違である。だから、私にとって単に歴史的であるに過ぎない全ての命題は、経験的命題であるが、同じ命題が私によって ……その内的必然性を洞察されるやアプリオリな命題となる」(ibid.)。

¹⁴ 「自然所産の全多様性は諸作用の種々の比率にのみ起因しうる。自然の全多様性は元素=作用の内のみ求められるべきである。物質は周く一であり、根源的な結合の比率のみが多である」(SW III 34f. 『自然哲学体系の第一草案』1799)。シェリングは、その探求を、自然哲学のカテゴリーとして、最初の統一としての「線」を表わす「磁気」、「面」を表わす「電気」、相対的無差別(「拡がり」)を表わす「化学過程」の「段階的系列」において展開するとしている(『力動過程および自然学のカテゴリーの一般的演繹』(1800))

だが¹⁵、それがカントが釘を刺していた、「独断論」に陥らないための「動力的」な範囲内での自然哲学の「形而上学的」想定に止まり得ているかと言えば、反対する立場が有り得よう。ヘーゲルは、あくまでカント「動力学」の立場に止まりつつ、「自然哲学」を批判する。

先に見たように、そもそもカント自身は、「自然の力動的段階」の決定については、それが「形而上学的にはなく」、あくまで「経験」（「自然科学」）に基づいて求められるべきであるとしていた。「第二章 動力学」の末尾、「動力学に対する総註」でカントは次のように述べていた。

「…単に考えることができるという理由だけによって想定し得る事柄は、以上ですべてである。なぜなら、こうしたこと以外に、引力や斥力の何らかの法則についてアプリアリオリな推測を敢えて行うことは許されず、すべては、重さの原因としての万有引力さえもが、その法則もろとも経験を通じて与えられるデータから推論されなくてはならないからである」（KA IV 534）¹⁶。

2. カント動力学の批判哲学的論理性

前節末で引いた「形而上学」に対する考えを、カントはただ経験的に述べているわけではない。『自然哲学の形而上学的原理』「第二章 動力学」でカントは、自らが「自然科学の最も重要な課題」と述べた「自然の力動的段階」の区別が、「経験的」（「自然科学的」）にしか決定できないものであることを——「斥力」の強度の決定が「無限小」に関わって事実上不可能なことの論証を通じて——「形而上学的」（「批判哲学的」）に証明してみせたと言ってよい。

そもそもカントが、こうした自然哲学的な論考（ニュートン力学の批判的基礎づけ）を、批判哲学の完成後に謂わば派生的に手掛けたという訳ではなく、逆で、ライプニッツの「力」の思想を批判的に、しかしダイレクトに継承したデビュー作『活力測定考』の延長上で——ライプニッツが、その予定調和論構想において、世界に存在を齎し、完成へと導いた

¹⁵ シェリングは『私の哲学体系の叙述』（1801）で、「理性」を対立する二極である「主観的なもの」と「客観的なもの」の「無差別」として、「根源的同一性」（ $A=A$ である「絶対的理性」）とし、それを「絶対者」としてそこから「生きた自然」を演繹することを哲学の目標とする。問題は、これまで見てきたとおり、絶対的同一性である $A=A$ から、どのように、アプリアリオリに「自然」の「段階的区別」「質的差異」を導出できるかにあるが、シェリングは、フィヒテの「行為の自己直観」論の延長上で、「主観」と「客観」には「質的区別」は無いとし、「量的差別」だけがあり、それによって生じる「ポテンツ」（勢位・展相）の差が、「 $A=B$ 」として表わされるとした。シェリングによって示された、以下の図がその論理構成を端的に表わしている。

$$\begin{array}{c} A+=B \quad A=B+ \\ \hline A=A \end{array}$$

¹⁶ 「…物質という経験的概念の根柢に存するものの背後に向かう形而上学の探求が有益であるのは、自然哲学をでき得る限り動力的な説明根柢の探求へと導くという意図以外には認められない」（ibid.）

めには、「どうしても必要」と見做した、目的論的に構想された力の概念（「活力」）を承けて（vgl. LPGIV 511¹⁷）—— ライプニッツ哲学の継承と目されていた Ch.ヴォルフの「独断論」との対質を通じてカントは、世界の目的論的完成（「感性的なものの多様」と「概念」との一致）を、「要請」が許されるだけの「可能的なものの制約」と見做す超越論的演繹論（「批判哲学」）構想を案出した、と見ることができる——。その視点に立てば、ニュートンが示してみせた、「作用／反作用」則からその存在が「要請」されなければならない、謂わば「形而上学的」な「斥力」を「第一の根本力」として、世界の体系的解明の基礎について、批判哲学的に許される範囲で「形而上学的」に立論してみせたのが、『自然哲学の形而上学的原理』（1786）ということができる。

『自然哲学の形而上学的原理』は、体系的な4章構成を有し、力学現象をニュートン的な衝突現象という側面から（批判的に）扱う「力学」（第三章）に先んじて、先ず「第一章運動学」として、「感官」の対象として経験される「運動」を、可能性として数学的に扱い——このこと自体、「世界」の「存在」を「感官」の対象として経験されることから始まるとカントが考え、「感官」を刺激する「運動」が、そこから理論的に前提できる第一のものであると考えていることの証左となる——更に、實在（「存在」）世界を取り扱う段階に進むにあたり、物質の「存在」自体、即ち「世界」の存立自体を説明するために、（第一章で「感官」の前提として論証された「運動」の概念を踏まえ）物質に「固有の運動力」が前提されなければならないとして、それを考察する「動力学」（第二章）が置かれ、「感官」に対する「抵抗力」として、「空間」を「充填する」「運動力」である「斥力」がそれに充てられ、そこから第三章の、以上を踏まえた物体相互の運動を實在性において考察する「力学」（いわば局所系における衝突現象の学）が論じられ、更にその上に、第四章として、個々の座標系相互の関係をとり纏め、「世界全体」の内に配するための規準としての「絶対空間」を「形而上学的に」想定する——ニュートン的な實在としての絶対空間とは別の——（ランベルト流の）「本質」学的な「現象学」が置かれる、という構成を採っている。そこで言われている「形而上学」は、故に当然ながら「独断論」として批判哲学によって否定される「形而上学」ではなく、経験的なニュートン力学および「自然哲学」（「自然科学」、すなわち「形而下」の学）を、その前提として「論理的」「形而上学」¹⁸的に補完する、その意味で「批判哲学」的な、試みである。

その「第二章 動力学」——即ち世界の存在の端緒を論じる¹⁹——冒頭でカントは、物質が存在する条件として、空間に対する「抵抗（力）」（「不可透入性」）が無ければならないとして（定義 I、定理 I KA IV496f.）、ニュートンが「引力」と等価の「作用／反

¹⁷ さしあたり以下を参照。「自然そのもの」（『単子論』河野訳（岩波文庫）所収 328 頁）

¹⁸ 「理性」のありようを「理性」によって問う、「メタ-フィジック」本来の意味において（Vgl. Fulda; 『カントとヘーゲル』上妻他訳（晃陽書房 1994）。

¹⁹ 現代の静力学に対する動力学とは異なる、カント独自の、「力」の概念を含む、「自然科学」の基礎概念の形而上学的な基礎づけが検討される、との意味内容なので注意が必要である。本稿では以下、カント的な意味で「動力学」を用いる。

作用」の関係にあるとした「斥力」を、単独でこれに充てる（定理Ⅱ KA IV499）。然し、前批判期の『天界の一般自然史とその論理』1755ではニュートン力学に忠実に、「引力／斥力」——「引力」を第一とするが、その「反作用力」としての「斥力」を合わせた、両力が不可分であることを明示した表記——をカントは用いていた。然しここでは「斥力」が分離独立の「根本力」として論じられており（定義Ⅱ KA IV498）、それ自体が「形而上学的」措定に他ならないように見える、その独立の措定の理由について先ず検証する。

カントのこうした「自然哲学」（自然科学）観、「形而上学」観（批判哲学）が、前節で検証した通り、フィヒテを嚆矢として、シェリング、ヘーゲルがそれに批判的に対質し、その態度決定からそれぞれが自身の哲学の方向性を定めることになった、ドイツ観念論の分水嶺と見られるのだが²⁰、「第二章 動力学の形而上学的原理」冒頭、カントは、「物質」を定義して次のように言う。

「定義一 物質とは空間を充実する限りでの運動可能なものである。空間を充実するとは、運動によって一定の空間の内に侵入しようとするあらゆる運動可能なものに対して抵抗することをいう。充実していない空間は空虚な空間である」 (KA IV496)

「存在」——つまり、この「世界」——の端緒（起源）を規定する「動力学」冒頭で、先ず、「物質」が定義されることに留意が必要である。論証されているように、「物質」が持つ「抵抗」（それを担うとされる「斥力」）が「存在」の機縁なのであり、つまり、その「抵抗」を感じ取ることの出来る「感官」、それによる「感覚されたもの」「感覚（経験）可能なもの」をカントは、「存在」すなわち「世界」の端緒とみているのに他ならない。その限り、カント『自然哲学の形而上学的原理』が標榜する批判哲学的立場は、優れて経験的なのであって、決して「形而上学的」（「独断論」的）ではない——後に見る通り、「引力」は、万象に備わり「万有」とされながら、「重力」を除いては感覚されない（「遠隔力」）ことから、カントはそれを「第一の根本力」とはしていない——。

加えて、最初に「感覚可能」な「抵抗（力）」を持つ「物質」が「存在」すなわち「世界」の第一と定義されることによって、その成立要件として言われている「空間」は、ここではまだ、実在以前の論理的要件、すなわち「形而上学的」「論理的」な前提に止まるものと理解される必要がある（「直観の形式」）。「抵抗」を生じる、すなわち「物質」を生じる「運動」も同様まだ「形而上学的」規定である。銘記されてはいないが、「運動」を可能にする「時間」も（まだ「空間」と未分化なまま）前提されなければならない。

²⁰ 序で示した通り、1) さしあたりカントの自然哲学（自然科学）観は認めつつ、その形而上学的補完（批判哲学）を不足と見て、その再補完を行う立場（フィヒテ自我哲学）、2) カントの自然哲学（自然科学）観を批判し、フィヒテ的な形而上学的再補完を一層進める立場（シェリング自然哲学—同一性哲学）、3) カントの自然哲学（自然科学）観は批判しつつも、その形而上学的補完（批判哲学）は遵守する立場（ヘーゲル哲学）、が考えられる。

続く「定理一」で、「物質」が「存在」するのは、「運動力」によることが規定され（「動力的世界観」）——「定理一 物質が空間を充実するのは、その単なる現実存在によってではなく、ある特殊な運動力によってである」（KA IV497）——その「特殊な運動力」について、カントはそれを、さしあたり、「引力」と「斥力」に二分してみせ、次のように定義している。

「定義二 引力とは、物質がそれを持つことによって他の物質を自分に接近させる原因となりうる、そのような運動力である（或いは同じことであるが、物質がそれを持つことによって、他の物質が自分から遠ざかっていくことに抵抗する、そのような運動力である）」

斥力とは、物質がそれを持つことによって他の物質を自分から遠ざける原因となり得る、そのような運動力である（或いは同じことであるが、物質がそれを持つことによって他の物質の接近に対して抵抗する、そのような運動力である）」（KA IV498）

見られる通り、「力」の向きが「作用／反作用」関係にあることに留意して、それぞれの「力」の向きが同時に相対的であり得ることが示唆されている（括弧内の言い換え）が、その上で、「定理二」として、「物質」を存在させる「根本力」が「斥力」であることが措定される²¹。

「定理二 物質が自分の占める空間を充実するのは、その物質のあらゆる部分の持つ斥力によって、いいかえれば、物質に固有の延長力によってである。この延長力は一定の強度を持つが、そうした強度に対しては、それより小さな強度を、あるいはまたそれより大きな強度を限りなく考えることができる」（KA IV499）

「斥力」が「物質」を存在させる「運動力」（「根本力」）であることの「証明」は、「物質」が空間を充実するのは運動力によるが（定理一）、他の物質の侵入即ち接近に対して抵抗する運動力（不可入性）によってのみ「物質」は保たれることができるから、このような運動力として「斥力」がなければならない（定義二）。もし物質のあらゆる部分が斥力を持っている訳ではないとすると、物質の占める空間の一部が（前提に反して）、充実されずに単に包囲されているに過ぎないことになり矛盾である。「物質」は「物質」（「延長体」）である以上、あらゆる部分に斥力が充填されていなければならず、故に延長体の力は延長力（拡張力）である。故に物質が空間を充実するのは、専ら物質に固有の延長力による（ibid.）。

以上見られる通りカントは、「物質」が「存在」するための「空間」を「充実」する「根本力」を、「感官」に対する「抵抗」（の「経験」）を基に第一義的に「斥力」に求めている。

²¹ 続けて「物質」がそれぞれ個別の「延長体」としてあり、それが持つ「延長力」に「固有の強度」があり得ることが、論理的に措定されるが、それについては後述。

その証明が注意深く理論的であり独断論的な意味での形而上学的ではないことに注意が必要である。末尾で言われているように、それが「物質」すなわち個々の「延長体」に「固有」の、様々な「強度」を持ちうる「延長力」と想定されており、続く「系一」で、「物質」の「拡張力」（「延長力」）は「弾性」と呼ばれるとされ、あらゆる物質の空間を充実する本質的性質として「根源的」と規定されている（KA IV500）²²。

先に指摘した —— シェリングが自身の自然哲学をその上に定礎した —— 「自然の力動的段階」の区別は、この「物質固有の延長力」、即ち「弾性」の「強度」の多様な区別のことである。だが、その確定が問題である。

一方、「引力」については、「定義五」で「物質的実体」が、それ自体として「物質」として存在するための理論的要件が定義された後、「定理五」として漸く規定されるが —— 「定理五 物質の可能性は、物質の本質をなす第二の根本力としての引力を必要とする」（KA IV508） —— それが必要とされる理由は、「物質」の「本質的性質」である「拡張力」（「斥力」）が、それだけでは「無限の拡散」を招くからである。

「証明 不可入性は物質の根本性質であり、物質はこれによって初めて、空間における実在的なものとして我々の外官に対して顕現するのだが、この不可入性は物質の延長能力に他ならない（定理二）。ところで物質の諸部分がそれによってたがいに遠ざかるところの本質的な運動力は第一に、自分自身によって制限されることは無い。なぜなら、物質はこの運動力によって、寧ろ、それが充実する空間を不断に拡張しようとするからである。この運動力は第二に、空間だけによってはその力の広がりによって一定の限界を定めることができない。…それゆえ物質は、自らの斥力（それは不可入性の根拠を含んでいる）に拠るだけでは、つまり他の運動力がそれと反対に作用するのでない場合には、いかなる延長の限界内にもとどまることがないであろう。言い換えれば、物質は無限に拡散し、特定可能な如何なる空間のうちにも、特定可能なほどの量の物質を見出すことができないことになるだろう。よって物質が単に斥力を持つだけではあらゆる空間は空虚となり、したがって、そもそも如何なる物質も存在しない結果となる。ゆえに、あらゆる物質はそれが現実存在するためには、延長力に対立する力、すなわち圧縮力を必要とする。…それゆえ斥力とは反対方向にはたらし、したがって物質を互いに接近させるように働く物質のある根源的な力がどこかに想定されなくてはならない。言い換えれば引力が想定されなくてはならない」（KA IV509）

問題は「引力」が、「感覚される」「物質の差異」に対応しては「感覚されない」、つまり「物質」一般に（個々の物質の差異を度外視して、「無差別」に）作用する「普遍的」な「性質」であることにある —— 「〔注解〕…ところでこの引力は物質であるかぎりでの物

²² 「この弾性は物質の他のいかなる性質からも導き出すことができないからである。従って、あらゆる物質は根源的に弾性的である」（ibid.）。

質一般の可能性に属するものであり、従って物質のあらゆる差異に先立つものであるから、こうした引力は単に特定の種類の物質に与えられるのではなく、総じて如何なる物質に対しても、しかも根源的に与えられるのでなくてはならない。故に、あらゆる物質には根源的引力が物質の本質に属する根本力として帰属する」(ibid.) ——。「故に」以下、明らかな論点先取として、「根源的引力」が「物質」の「本質」に属さねばならない(と「推論」されねばならない)理由をカントは、次のように説明する。

「もし引力が物質の可能性のためにさえ根源的に要求されると言うのであれば、我々は何故、この引力を不可入性のように物質の第一の特徴として用いることをしないのであろうか。不可入性が直接に物質概念と共に与えられるのに対し、なにゆえ引力は物質概念の内では思惟されず、もっぱら推論を通じて物質概念に付加されるだけなのであろうか。事実、我々はこの引力を、不可入性による反発や抵抗の場合の様に、我々の感官によって直接に知覚する訳にはいかないからである」(ibid.)

見られる通り、個々の「物質」が持つはずの「引力」が「感覚されない」点がネックなのであり、仮に個々の「物質」が持つ「引力」が「感覚された」としても、それが個々の「物質」の「力動的段階」の「区別」を与えない(「物質」の「差異」には左右されない)点が問題なのである —— 「引力は、たとえ我々がこれを十分に感覚することができたとしても、決して一定の体積と形態とを持った物質を我々に顕示することは無く、我々の外にある一点(我々を引き寄せる物体の中心点)に向かって接近しようとする我々の身体の運動傾向以外の何ものも顕示することはないであろう」(KA IV509) ——。

見られる通り、カントにとって「物質」存在のメルクマールは、「抵抗」の「強度」の「段階」によって、「物質」の区別を「感官」に伝えることができる「斥力」を第一とするのであって、その限りカントの「自然哲学」は —— 「引力」を、理性的推論により「物質」一般の、即ちその「可能性」に対する「本質」として想定する「ニュートン力学」以上に —— 「経験」的なのである。

「定理五」から展開された「引力」を巡る規定は、以上の様に進められた後、次の「定理六」で、「斥力を欠いた単なる引力に拠る限り、如何なる物質も可能ではない」(KA IV 510)と、一旦締めくくられるが、その「証明」で、「引力」は「物質の運動力である」とされ(ibid.)、続く「系」で、「引力」と「斥力」とは「分離不能」とされる。

「系 ある性質が条件となって、物の内的可能性さえもがそれに依存する場合、その様な性質はその物の本質的部分である。それゆえ、斥力は引力と全く同様に物質の本質に属するのであり、両者は物質の概念において互いに切り離すことができない」(KA IV511)

「物質」の存在要件として、「感官」に対する「抵抗（力）」の具体性をもって「第一根本原因」と見做された「斥力」に対し「引力」は、同様に「(第二) 根本力」とされながらも、専ら外的な「運動力」と見做される (Vgl.KA IV514) のに対し、ここにきて「引力」は「斥力」と不可分のものとして、「全く同様に物質の本質に属する」とされる。固より「物質の本質」に属するとされていた普遍的な根本力は「引力」なので、「斥力」がそれに加えられると理解されるのだが、こうした明らかな循環定義が行われている理由は、従前カントはニュートンの「第三法則」（作用反作用の法則）に倣って「斥力」を「引力」の反作用力として、元来同一のものと見做してきたこと、しかしそれが、ここ「動力学」では、「斥力」が「物質」存在の「第一根本力」として、個々の「物質」の「体積と形態」の「段階的区別」を結果する、いわば個別性の原理でもあるものとしてクローズ・アップされてきたこと、然るにその「斥力」が、この後見るように、事実上は、物質と物質の「接点」に作用するものとして、「無限小」の空間においてその強度が実際には測定不能とされざるをえないものであること、いわばそれは「形而上学的」存在であると考えられざるを得ないものであること、がその原因と考えられる。

以上一旦纏めると、カントがその「動力学」において、世界の成立について「形而上学的」に考えるに際し、その起点としたのは、然し「感覚可能性」であり、それと対応する限りでの「物質の段階的区別」の「原理」の探求であった —— 「物質的自然の動力学の普遍的原理」は「外官の諸対象となる全実在は、空間の単なる限定（位置、延長、形態）とは異なり、すべて運動力とみなされなければならない」と表される (KA IV523 「動力学に対する総註」) —— 。換言すれば、あくまで「感覚可能」な「世界」の「存在」、その「差異」を起点として、「批判哲学」的に、「独断論」に陥ることなく、その成立のための理論的前提を検討することが、カントが「自然哲学の形而上学的原理」と呼んだものの実相である。

「斥力」と「引力」とが共に「物質」存在の「根源力」として不可分であることを証示して後、カントは、それぞれの「力」の特性の検証に進む。「物質」の相互作用は、近接的な「接触」と、接触を伴わない「遠隔作用」に二分される —— 「定義六 物理的な意味での接触は不可入性による直接的な作用と反作用である。接触以外の仕方では一方の物質が他方の物質に及ぼす作用は遠隔作用である」 (KA IV511) —— 。感覚可能な「接触」による「近接作用」（「斥力」）はいいとして、問題は「遠隔作用」（「引力」の存在）の定義である。「定理七」「あらゆる物質の本質を成す引力は、物質が空虚な空間を通じて他の物質に及ぼす直接的な作用である」 (KA IV512) は、そもそも「引力」が「物質」の「本質」として存在していなければ成立しない、循環定義である。カントはその説明に、「根本力」の概念を持ち出す。

「注解一

根本力の可能性について理解されるべきである、という要求はまったく不可能な要求である。というのも、そうした力はまさしく他のいかなる力からも導出され得ない、即ち理解され得ないからこそ根本力と呼ばれるのだからである。とは言え、根源的引力は根源的斥力に較べて、いささかも不可解なものであるわけではない。ただ根源的引力は、不可入性のように空間における一定の対象についての概念を我々に提供すべく直接的に感官に表れることがないだけである。そこで根源的引力は、感知されることなく推論されるだけであることから、その点で派生的な力のように見えるのであり、恰も斥力による運動力の隠れた振る舞いであるかのように見えるのである。しかしより詳しく考察するならば、根源的引力が決してどこからか導出され得るものではないこと、少なくとも物質の不可入性による運動力から導出され得るものではないことが分かる。根源的引力の作用は不可入性に拠る作用とは正反対だからである」 (KA IV513)

「不可入性による作用」とは「正反対」の「引力」の實在は、地球と月の相互作用の事実に求められる。しかしカントは、「接触」によるとした「斥力」も含めた「力」一般の概念の分析 —— 概念における矛盾の指摘 —— に進む²³。

「… [地球が月を強要して自分に近づける場合] 物質はそれが存在していない場所で直接的に作用することになるが、これは一見したところ矛盾であるように見える。が、それは決して矛盾ではない。むしろ、空間の内に存在する如何なる物も、それが他の物に作用する場合、存在するものが存在していない場所でしか他の物に作用することができない、ということができる。…」 (ibid.)

「存在していない場所」で作用する「遠隔力」の概念が「矛盾」と見られるのを承けてカントは、むしろそれが、「斥力」による「接触」も含めた「力の作用」全てに共通する、概念的「矛盾」であることを指摘している —— 「…仮に地球と月が互いに接していたとしても、その接点は地球も月もそこに存在してはいない場所である。…更に、この接点においては地球と月の如何なる部分も決して見出されないだろう。なぜなら、この接点には二つの充実空間の境界上にあり、この境界は双方の如何なる部分もなさないからである。ゆえに、物質同士が離れていては直接的に作用しあうことができない、と語るならば、それは、不可入性による力の媒介がなくては物質同士は直接的に作用しあうことができない、と語るに等しい。…が、この場合、空間同士の数学的な接触と斥力による物理的な接触との混同が誤解の元を成している訳である」 (KA IV513f.)²⁴ —— 。

²³ 後に、「テーゼ」『惑星軌道論』以降の、ヘーゲルが進む道である。

²⁴ (「[注解二] …一般の見解によれば、ニュートンは自分の理論体系の為に物質の内に直接的な引力を仮定する必要を認めず、この点に関しては純粋数学の非常に厳しい自制をもって物理学者たちがそうした引力の可能性について思いつくがままに勝手に説明を与えるに任せ、自分の発見した諸命題が彼らの仮説の戯れと関わり合うことを回避した、とされている。しかしながら、

見られる通りカントの解決は、「接触」の「数学的な」規定と「物理的な」現実 —— すなわち「感覚される」現実 —— との混同の指摘である。批判哲学的に「接触」の「数学的」概念と「物理学的」概念とが区別されているが²⁵、「物理学的接触」の成立は、あくまで「現実」にそれが「観察される」ことに委ねられるのである。

「[定義六] 注解 数学的な意味での接触は二つの空間の共通の境界である。したがって、この境界は二つの空間のどちらの内部にも属さない。それゆえ、直線同士が接することはなく… 両直線は交わる。…こうした数学的接触は物理的接触にさいして根柢に置かれてはいるが… 物理的接触が数学的接触から生じるためには、この数学的接触に加えて、ある動力的関係が考えられなくてはならず、しかも引力同士の関係ではなく斥力同士の関係が、つまり不可入性の関係が考えられなくてはならない。すなわち物理的接触は二つの物質の共通の境界における斥力同士の相互作用である」(KA IV512) ²⁶

続けてカントは、「普遍的引力」が仮定される必要について、その理由を挙げ、第一に、それが、「引力」によって生じる「運動」の法則であり、「運動力一般」を扱う「力学の原理」からの要請であること —— 「二つの物体があつて一方が他方を引く場合に、物質の種類が同じであろうとなかろうと、両物体の相互的な接近速度は（相互作用の相等性の法則に従って）物質質量に反比例して生じなくてはならないのであるが、この法則は単に力学の原理に過ぎず、動力学の原理ではない。すなわち、この法則は引力に基づいて生じる運動の法則であつて、引力そのものの比に関する法則ではなく、従つて、あらゆる運動力一般に当てはまる」(KA IV514) ²⁷ —— 、第二に、接触状態にある引力からは如何なる運動も生じ得ないが故に —— 「なぜなら、接触は不可入性による相互作用であり、したがつて、あらゆる運動を抑止するから」 —— 「接触に抛らずに、すなわち遠隔的に作用する何らかの直接的な引力が見出されなくてはならない」(ibid.) とする。それが「引力」現象の實在に訴えていることは明瞭である。

一方、「力の概念」がその本性上含む「矛盾」は「斥力」に対しても考慮されねばならないが、「定義七」で「接触」を巡つてその再定義、細分化が行われ、「物質」の「不可透入性」の「力」とされた「斥力」相互作用 —— 「物質同士が共通の接触面だけで直接に相互作用する場合」(KA IV516) —— が「表面力」(Flächenkraft) であるのに対し、「一方の物質が他方の物質の諸部分に接触面を超えて直接に作用し得る場合」、即ち「遠隔力」

もしニュートンが、あらゆる物質は単に物質である限りで、その本質的な性質によってこうした運動力を行使する、と仮定したのでなかったとしたら、いったいいかにして、かれは、諸物体が自己の周囲の等距離に及ぼすところの普遍的引力〔の大きさ〕が自己の物質質量に比例する、という命題を基礎づけることができたというのか。…」(KA IV513f.)

²⁵ 「数学的アンチノミー」と「物理学的アンチノミー」との区別が想起される。

²⁶ つまり概念的にはその「成立」はなお「矛盾」と見做されなければならない訳である。

²⁷ 『プリンキピア』第3編命題6、「木箱の実験」(異なる物質を木箱に入れ、吊るして振動させる) 参照。

gとしての「引力」による接触が「透入力」(druchdringende Kraft)とされる (ibid.)²⁸。

「透入力」と再定義された「根源的引力」が「物質の可能性の根拠をなす」とされる理由が次のように述べられるが、その作用にあたっては「それに対抗する反発力」が必要とされる。「力」の「作用／反作用」の「事実」に訴えられるのである。

「系一 こうした根源的引力は、あらゆる物質がその物質質量に比例して行使し、また、あらゆる物質に対してどんな遠方にでもその作用を及ぼすところの透入力であるが、こうした透入力としての根源的引力が、それに対抗する力すなわち反発力と結びつくことによって、この反発力に対する制限が帰結として生じ、換言すれば、一定の強度で充実された空間の可能性が帰結として生じることになる。それゆえにまた、空間を(一定の強度で)充実する運動可能なものとしての物質という、動力学的な概念が構成されるであろう。しかし、そのためには、物質同士もしくは物質の部分同士のさまざまな距離において定まる根源的な引力と斥力との関係に関する法則が必要となる。こうした法則は、この二種類の力の方向の違い(一点は他の点に接近する様に動かされるか、他の点から遠ざかるように動かされるかのいずれかである)、および、この二種類の力の其々が大小さまざまに広がる場所の空間の大きさとに専ら依存するが故に、かかる法則を見いだすことは純粋に数学的な課題であり、もはや形而上学に属する課題ではない」²⁹

(KA IV517f.)

「根源的引力」は「反発力」と「結びつく」ことによって作用するとされるが、それが「物質」を「動力学」的に「充実」する「斥力」に同定される訳である——「系二 与えられた物質は全て、それが一定の物質的なものを形成するためには、一定の強度の斥力をもって空間を充実しなくてはならない。それ故、根源的引力は、それが根源的斥力と対抗関係を成すことによってのみ、一定の強度の空間充実を可能にすることができ、したがってまた物質を可能にすることが出来るのである」(KA IV518)——ここにおける定義の循環は、現実には「引力」「斥力」が、反作用関係にある「引力／斥力」であると考えられることによって理解される。続けて、次のように言われている。

「根源的引力は物質質量に比例し、また無限に広がる、それゆえ、物質による一定の強度を持った空間充実は、究極的には物質の無限に広がる引力によってのみ生じ、各物質にはそれぞれの持つ斥力の程度に応じて与えられるのである」 (ibid.)

²⁸ 続く「定理八」で、「根源的引力は物質が物質である限り、その可能性の根拠をさへなすものである」とされ、「こうした根源的引力は物質の各部分から直接、他のあらゆる物質部分へと宇宙空間において無限に広がる」とされる (ibid.)。

²⁹ 「形而上学が責任を負うのはもっぱら、概念の構成にさいして我々の理性認識に許された構成諸要素が正当なものであるか否かという問題に対してだけであって、概念の構成を実際に行うにあたって見られる、我々の理性の不十分さや制限については、形而上学に責任がある訳でないからである」(KA IV517f.)

カントは、「物質量」に比例する「根源的引力」を「重力」としているが、それが理論的前提にとどまることは、続けて実際の物質相互間の関係中における相対的な「引力」を「重さ」として区別していることから明らかである —— 「全ての物質が全ての物質に対して、またあらゆる距離に渡って直接に行使する普遍的引力に拠る作用は重力（die Gravitation）と呼ばれ、より大きな重力に向かって運動しようとする傾向は重さ（die Schwere）と呼ばれる」（*ibid.*） ——。「斥力」も実際には、「根源的な弾性」として感覚され、「この根源的な弾性が物質の内的な特性をなし、また重さが外的関係における物質の特性をなす、という違いはあっても、唯一、この二つの性質だけがアприオリに洞察可能な物質の普遍的特性をなす。なぜなら、物質の可能性そのものがこの二つの性質に依拠しているからである」（KA IV518）とされる。

だが、「遠隔力」として「空間」に伝播する「引力」（「定理7」 IV516）が、その「空間」を根拠として数学的に計量化可能であるのに対し、「物質」が持つ「抵抗」（「表面力」と見做される「斥力」は、定義上、「空間」と「空間」との「接触」、すなわち「接点」（「無限小の距離」）において作用すると考えられることから（「定理7、系 *ibid.*）、「斥力」は —— 「斥力」もまた「力」である限り「四方」、即ち立体的な「三次元空間」を作用空間とする点では「引力」同様その「三乗〔三次元〕に反比例する」と定式化することはできても —— 実際にはそれが作用する「接点」は数学的に「無限小」に解消されてしまうが故に、その個々の度合いは原理的には決定不能であり、最終的に、ただ経験的に測定されるだけのものとされざるをえないのである（「定理8、注解1、(3)」 KA IV520f.）。

「〔定理八、注解一（4）〕従って、物質の根源的引力が距離の二乗に反比例してあらゆる遠方に渡って作用するのに対し、根源的斥力は無限小の距離の三乗に反比例して作用するであろう。そして、この二つの根本力のなす作用と反作用によって、一定の強度で空間を充実する物質が可能となるであろう。…」（KA IV521）

以上を踏まえて、ヘーゲルが『惑星軌道論』でシェリングの立場ではなく、あくまでカント批判哲学の立場をとったとすれば、「精神」を「無制約的なもの」として、そこからの「アприオリな段階的系列」を「自己直観」により「有機機構」として見るシェリングの自然哲学とは別の、あくまで「現象」を起点として、その成立の理論的前提を形而上学的論理学的に問う立場から、非構成主義的・批判哲学的に、自然科学を批判していく認識論の可能性が考えられねばならないだろう ——（前稿で検討した論文「信と知」の）「テーゼ I」の認識観が、参照されなければならない —— 30。

³⁰自然が辿る歴史については、周知の通りヘーゲルは、『精神現象学』「理性」章「自然の観察」で、生成史一般が個別性を欠き（その意味で決定性を欠く、「偶然的な」）理論的形式的なもので

3 ゲーテ自然哲学・現象と理念

「精神」の「自己直観」に俟つとはいえ、「根源力」からの「自然」の構成を目論んだシェリング自然哲学・同一哲学に対し、ヘーゲルが長年取り組んだことが知られているゲーテの自然哲学には、明らかに別の思想を見出すことができる。

早くからのスピノザに対するゲーテの心酔には、自然科学思想の時代的发展に伴うキリスト教的神観の変化、当時の理神論的風潮（後のカント主義）に対する（ヘーゲルにも通じる）理性的反発がその根底にあった。啓示を通して神に近づくピエティズムの宗教的厳格主義も、それ故、理神論的自然観から見られた機械論的自然よりは「生きた自然」とともに在ることを感じさせるものと受け取られ得た。そうした中、ゲーテがスピノザの『エチカ』に出会ったのは冬のブロッケン山の登頂の後、1773年のこととされる³¹ —— 「私に決定的な影響を与え、私の考え方全体に大きな作用を及ぼしたのはスピノザであった。私のような特異な人物を形成してくれる手段を私は色々な世界に求めたが、空しい努力を重ねた後で私が遂に巡りあったのは、この人の『エチカ』であった」（Goethes Werke:Hamburger Ausgabe (HA) ;Bd.12 X 35) ——。

あらゆる論争の根拠となるとして人知を退けるスピノザは（『エチカ』第一部付録）、自然そのものの「直観」を自身の哲学の出発点に置く —— 「自然はいかなる目的も立てず、またすべての目的原因は人間の想像物以外の何ものでもない」³²（『エチカ』第一部付

しかないと批判している。「有機的自然は、一般即ち生命から個別すなわち実在へと直接〔個別化の契機を欠いたまま〕転落〔展開〕する。…両契機〔種差としての類と生命性の契機〕は生成を偶然的〔個別的ではなく一般的でしかない〕運動として生み出すに過ぎない」(GWIX 165f.)。

ヘーゲルが、「…有機的な自然は何ら歴史を持たない」(ibid.)と批判するのは、「悟性」段階から、「有機体」の観察によって「理性」へと進んだ「意識」が、「諸形態の体系」を立てはしても、この体系はまだ、「自分のうちに根拠〔Grund〕を持たない体系」、換言すれば「分化するに際して〔必要な〕現実の理性的系列と分枝を持たない」「ただ生命一般としての理性的なもの」にとどまるからである (ibid.)。逆に言えば、「有機的なものの形態化の推理連結において、その媒介としては種と個別的な個性性となった種の現実態とが属しているが、この媒介が自分自身によって内的な普遍性と普遍的な個性性という両極を備えるに至れば、この媒介は自分の現実態の運動に即して普遍性を表現し、また普遍性の本性を備え、かくして自分自身を体系化しつつ展開することであろう。実際、意識はこのような具合に、普遍的な精神と個の精神の個性性、すなわち感覚的な意識との間に、媒介としての意識の諸形態化の歴史を備えているのであり、しかもこの体系は、全体にまで自身を秩序付ける精神の生命としてのものであるが、——この体系こそはこの書において考察されている体系であり、また世界史として自分の対象的な定在を持つところの体系である」(ibid.)。つまり、「意識」において創り出される「理性的系列」が普遍的な体系となるためには「現実の個性性」がその契機「〔意識にとっての〕対象的な定在」として含まれなければならない、「現実」におけるその展開 —— 「世界史」 —— が、「理性的系列」の「体系」を「普遍的」なものとするのである。

³¹ 1770年の『エフェメリデス』に既に次のような記述が見られる。「神と自然を分けて論じるなどということは、なかなか出来ることではないし、また危険なことでもある。それは身体と精神を別々に考察するようなものだ。精神は身体を通じてのみ認識されるし、神も自然の観察を通じてのみ認識することができる。…この世に存在する万物は、神の本質に属している。と言うのも神こそは唯一の実在であり、万物を包摂しているからである」(Goethe:Sämtliche Werke. Zürich 1977.(GA) IV, 966)

³² ゲーテ：「生物はある目的のために外界に向かって生み出されたものであり、生物の形態はそ

録) —— 。それを自身の原理として、ゲーテは言う。「[ものを見るという営みが] ただものを眺めているというだけのことでしかなかったとしたら、我々は少しも先に進むことはできなかつたらう。熟視は観察へ、観察は思考へ、試行は統合へと必ずや移行するものであって、だから世界を注意深く眺めているだけで、我々はすでに理論化を行っていることができる」(Goethe:Die Schriften zur Naturwissenschaft.1947ff.(Leopoldiner-Ausgabe.(LA) I -4,5)。

「あらゆる事実がすでに理論であると知ることこそ最上のことであろう。空の青は、我々に色彩論の根本法則を開示してくれている。現象の背後に探してはならない。現象自体が学説なのだ」(HA,X II; Maximen und Reflexionen. 1. Aufl, 488(575))

スピノザによれば、「理念とは、思惟することを旨とする精神が形成する、精神の概念のことである」(第二部定義三; Spinoza Opera(Gebhardt)(SO)84)。「真の理念はその対象と一致しなければならない。言い換えれば、知性の内に客観的に含まれているものは、必ずや自然の内にも存在しなければならない」(第一部定理三十 SO 71)。「身体理念… 現実存在する個々の事物の理念は、いずれも神の永遠にして³³無限なる本質〔形相的本質〕を含んでいる」(第二部定理四十五 SO 145)。

ゲーテはヤコービに宛てて書いている(1786)³⁴。「あなたが、神はただ信じるのみだとされるなら、私は直観(Anschauung)を大事にすると言わざるを得ません。スピノザは「直観知」について語っていますし、「この種の知は、神の属性の形相的本質についての十全な理念から出発して、事物の本質についての十全な知へと進むものだ」とも述べていますが(第二部定理四十 SO 120)、この言葉は、私の全生涯を事物の観察に捧げようという勇気を与えてくれます。私はどうかして事物の観察をなすとげ、その形相的本質から然るべき理念を作り上げたいものだと思っています」³⁵。

の目的を遂行しようとする或る意図的な根源力によって決定されているという〔自然科学的〕見方に対し… 魚は水の為存在するというよりも魚は水の中で水によって存在すると言った方が、ずっと含蓄が深いように思われる」(LA I -10,118)

³³ ゲーテの年長の友人でもあったヘルダーは、スピノザの言う神を「力」のことだとしながらも、その形而上学はデカルト的な機械論の名残を残しスタティックな体系に止まっていると批判していた。

³⁴ そもそもヤコービによるスピノザ論争のきっかけは、ヤコービがゲーテの詩『プロメーテイス』(1774)のスピノザ的汎神論を見咎めて、御大レッシングに問うたところ(1780)、意外にもレッシングもまたスピノザに対し肯定的だったことに端を発している。

³⁵ ゲーテは、レッシングの死後、その論争の出版に際して校正刷りを送ってきたヤコービに対し自分もスピノザ主義者であると認めて書き送っている(1785.6.9)。「あなたが認めておられるように、スピノザ主義全体の根底をなしているのは、他の一切がそれに基づき、他の一切がそこから流出してくる最高の実在です。スピノザは神の存在を証明したりはしません。存在が神なのですから。そのために他の人達が彼を無神論者であると非難するなら、私は、彼こそは最高の有神論者、最高のキリスト教徒であると言って、彼を讃えたいと思います」。「私にとってスピノザ主義と無神論とは別のものです」(1785,10,21)

『エチカ』第三部冒頭には、次のように書かれていた。

「自然は常に同一であり、その力や作用は至る所一つにして同一なるものである。言い換えれば、すべてのものがそれに基づいて生まれ、一つの形相から別の形相へと変化してゆくその自然法則と自然規則とは、いつでもどこでも同じものなのだ。だからあらゆる事物の本性を認識する方法は、一つにして同一なるものでなければならない。普遍的な自然法則と規則に拠る認識でなければならない」(SO 138)

そのゲーテの注目を引いたのはカント『判断力批判』§ 80 である —— 「…動物にはじつに多くの属があるが、それは或る共通の図式 (Schema) において一致しているし、この図式は、動物の骨格においてのみならず、その他の部分の配列においてもその根底をなしているように思われる。しかもこの基本的構造は驚くほど単純なものなのに、その或る部分を短くしたり長くしたりすることによって、またある部分を畳み込んだり開いたりすることによって、実に多様な種を生み出すことができる。こう考えてみると、自然の機械論的原理——これが無ければ、自然科学というものはあり得ない——を採用することによって、何事かが達成させられるのではなかろうかという、かすかな希望の光が心中に兆してくるだろう。生物の様々な形は、それらが有している幾多の差異にも拘らず、或る共通の原形象 (Urbild) にもとづいて産出されているように見えるが、生物の諸々の形の間のこのような類似 (Analogie) は、これらの形が或る共通の根源的な母胎から生み出されたために、現実の親縁関係 (Verwandtschaft) を有しているのではあるまいかという推測を強める。或る種の同種の類は別の類へと段階的に接近してゆく。つまり〔自然〕目的の原理が最も確証されているように見える人間から始まってポリープにいたるまで、またポリープに始まって蘚苔類や地衣類に、そして最後にはわれわれが知っている自然の最下段である生の物質に至るまで、段階的な接近があると推測されるのだ。〔逆に言えば〕この生の物質とその諸力から、(結晶化作用に見られる法則にも似た) 機械論的法則にしたがって、自然の技巧の全てが繰り広げられてきているのではないかと思わずにはいられない。有機体における自然の技巧はわれわれにはまことに理解しがたいものなので、そのため我々は、〔機械論とは違った〕或る別の原則を考えざるをえないのである。」(KAV 418)³⁶

(以下続稿)

³⁶ 同 § 81 「…実際、天然のままの物質が機械的法則に従ってそもそもの初めから自己形成を行ってきたのだとか、生命の無い自然から生命が発生したのだとか、自己保存を旨とする合目的性と言う形式に物質が自ら適合してゆくことができたのだとかいったことを、氏 (ブルーメンバッハ) が理性に反すると言っているのは当然のことである。氏によれば〔自然には〕根源的な有機的組織化という、我々には究め難い原理があり、この原理の支配下において自然のメカニズムは、定かに確定はできないものの、〔有機的形成に〕明白に関与している。氏は、有機的物体に見られるこうした能力を ——物質に偏在する単なる機械的形成力とは区別し、根源的な有機的組織化の謂わばより高度の働きと指示にしたがうものとして——形成意欲と名付けている」